
インフィニット・ストラトス 《名も無き虫はカゴの中》

虚々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 《名も無き虫はカゴの中》

【Nコード】

N7890W

【作者名】

虚々

【あらすじ】

ISと呼ばれる兵器が広がり、国力増強に資金を注ぎ込む世界。竈午は組織の命により、ISの研究施設へ赴いた。

目的はただ一つ、殺戮。

血で血を洗う惨劇の後、保管されていたISを見つける。

濡れ羽色の甲冑。

そして行方不明である筈の篠ノ之束も現れて、極めつけに竈午はISを起動させてしまう。

――面白い。

篠ノ之束のその言葉により、竈午はIS学園へ入れられてしまう。
同級生には、世界で初めてISを動かした男である織斑一夏。
そして同業者の蜚？。

更にはかつて対峙した藤井有栖も。

この封鎖的な虫籠で、名も無き虫の行く末とは。

※原作と違う展開、オリジナルIS、キャラ崩壊が至る所に見られますのでご注意下さい。

※藤井有栖と竈午は一応和解しております。アラクニド本編の時系列は完全に無視してますのでご了承下さい。

オリジナルIS設定

●ナルギスボーラ

藤岡響の専用機。

濡れ羽色の装甲で、異様に太い脚部が特徴的。

一切の武装を持たず、肉弾戦専用の機体と言っている。

更に長時間の飛行も困難であり、メインは脚部の大出力による跳躍力。

名前の由来はサイクロンの名前から、ナルギスとボーラを合わせたもの。

武装…腕部ブースター”あぐに火天”

両腕に各々一つずつ着けられている高出力ブースター。

背中のスラスターと併せて極めて変則的な動きを行えるが、機動力は低め。

主な活用手段は拳速を上げて物理攻撃の威力の底上げくらいである。

名前の由来はアグニカマドウマから。

●とりぐい鳥喰

基本装甲と特殊なワイヤーのみで構成された藤井有栖の専用機。

薄い朱色の装甲で、必要最低限のパーツ以外無く、そのため余計な力もかからず動き易い。

反面装甲の少なさが防御力の低下を招いており、勝つためには一工夫も二工夫も必要不可欠な機体。

名前の由来はタランチュラの和名であった鳥喰い蜘蛛から。

武装…特殊ワイヤー”アラクネー”

有栖の用いる”蜘蛛糸”を模した特殊ワイヤー。スレッド

先端には簡易的なフックが取り付けられており、これを基点として罠を張り巡らせる。

有栖の特徴であるCECを用いての運用を前提としているため、集中力が途切れると蜘蛛糸同様、自分が縊り殺されることとなる。

名前の由来はギリシャ神話に登場する織り手の女性であるアラクネーから。

●トラペゾイデウス

沖めぐみの専用機。

褐色のクリアパーツで構成され、背部には二つの大型ブースターと四つの補助スラスタが搭載されている。

小柄なめぐみの体型に合わせ、機体も他のISに比べ小さい。

めぐみの特殊技能である”風読み”エアディテクションを前提とした超高機動特化機体であり、他の誰にも扱うことは出来ない。

名前の由来はトラペゾイデウスゴキブリから。

武装…マシンガン・近接ブレード併用特殊兵装”大瑠璃・窟鬼丸”おおるり　くちきまる

射撃精度は低いが圧倒的な弾数を誇る大型マシンガンの大瑠璃。

そしてショートソード程度の長さで扱い易い近接ブレード窟鬼丸。

最初は大瑠璃の形態だが、砲身を握り特殊な信号を出すと形状が変化。

砲身が柄、グリップが刃となり窟鬼丸となる。

名前の由来はオオゴキブリ、ルリゴキブリ、クチキゴキブリ、マルゴキブリから。

1. 正義を信ずる竈午は世の天才を知る（前書き）

アラクニドは四巻までしか持っていないので、月刊雑誌の最新話での展開を知りません。

なので、最新話を知っている方には不自然に思う場面もあるでしょうが広い心で読んで頂けると幸いです。

1. 正義を信ずる竈午は世の天才を知る

何故、何故、何故。

自問を繰り返せども答えなど分らない。

彼にしてみればいつもの仕事であった。

ただ、仕事の相手がISの関係者であった。

それだけだ。

何も変わらない。

ただ、対象を殺すだけ。

無駄な流血も。

金品の強奪も。

対象の陵辱も。

無意味な高揚も。

無価値な感情も。

全て、全て、全て。

何も無く。

あるのはただ正義の名の下の純粋な殺戮のみ。

血の海に溺れる対象を尻目に、彼はふとISを目にした。

——インフィニット・ストラトス。

宇宙空間の活動を想定したマルチフォーム・スーツ。

しかし、白騎士事件により事情が一変。

軍事転用され、兵器として利用されている代物。

そしてISは女性にしか動かせない。

「……可変ライダーは——」

そのISは妙な存在感があった。

まるで生きているかの様な、そんな奇妙な存在感が。

「可変ライダーは改造人間。昆虫の特殊能力を武器に、悪を倒す正義のヒーローだ」

一歩、また一歩とそのISへと近づいていく。
濡れ羽色、とても言おうか。

そのISは黒く、そして芸術的な光沢。
さながら刀のような、鋭い印象があった。

「では、その昆虫が何か……知っているか？」
「バッタじゃないの？」

その問いに答える者が一人。
後ろを振り向けば奇妙な女。
機械的なウサ耳のカチューシャを着けた、幼さが目立つ女。

「……確かに、可変ライダーは子供が親しみやすいようにバッタ型と称してある」

しかし、と男は続ける。

「あの尋常ならざる精強さと、必殺の蹴り技を見れば本当はカマドウマ型であることは明らかだ」

「君、結構捻くれてるよね」

「バッタの跳躍は逃げの一手。蹴り技などいらんだろう？」
「あはは、そうだね」

そして男は再びISへと目を向ける。
芸術的。

しかし、それでいて呪いじみた狂念を感じられる。
妖刀、そんな言葉が頭を過ぎる。

「興味ある？　ISに」

「だが、使えなければ意味が無い」

何気なく男はISに手を置いた。

それが己の未来を決定付けるとも知らずに。

「ぬ？」

「およ？」

気付いたのは両者同時であった。

その黒いISが光を放ち始めたのだ。

まるで新しい主を歓迎するかのように。

「……おい」

「何？」

「ISは女にしか使えないのでは無かったのか？」

「君が特別なんだよ、きつと。いっくんもそうだったしねえ」

男の頭には既にISを起動するための知識が詰め込まれていた。

世界で二番目にISを動かせるようになった男。

「名前は？」

カマドウマ

「竈午だ」

「”組織”の名前なんて聞いてないけど」

「……藤岡、響。借り物だな」

「うん。これからヨロシク。私は篠ノ之束。気軽に束ちゃん、って

呼んでねヒビキン」



冗談のような出会いから数日後。

藤岡響はIS学園の門を潜っていた。

どうしたモノだろうか、とため息を一つ。

そしてこの教室には自分以外の男が一人。

織斑一夏。

世界で最初にISを動かした男である。

「私は副担任の山田真耶です。皆さん一年間よろしくお願ひしますね」

教壇に立っている女性はニコリと笑顔を添えて言う。

しかし返事はない。

皆が一夏と響に注目しているからだ。

女性にしか操れぬ兵器。

それを男が、しかも二人動かしたとなれば注目もするだろう。

珍獣か何かを見ているような、好奇心に染まった眼差し。

「えっと、じゃあ最初のSHRは皆さんに自己紹介をしてもらいましょうっ」

努めて明るく振舞う山田先生。

そして”あ”から始まる女子から自己紹介を開始する。

「何であなたが一年の教室にいるんですの？」

「……沖めぐみ、か」

隣から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

沖めぐみ。

コードネームは”蜚^{ゴキブリ}?”。

響と同じ組織に属する殺し屋であった。

「I Sに関しては初心者も同然だからな。飛び級などできん」

「まあ、それならそれで構いませんけど……アリス様に手を出せば、タダじゃおかねえですよ？」

「貴様らが悪となれば、正義の真理をその心身に刻むまでだ」

とは言え、響もめぐみを敵に回す愚はおかさない。

蜚？が本気になればこの場に居る全員の意識を、自分に向けさせること無く暗殺できるからだ。

今はまだ動かない。

そう、彼女らが悪に染まるまでは。

2. 名も無き虫達は虫籠で何を思うか

自己紹介が終わり、織斑千冬が教室に現れ、一同が沸いた。

「ずっとファンでした!」

「お姉さまに憧れてました!」

「千冬様のためなら死ねます!」

そんな熱烈なラブコールを向けられた本人はため息を一つ。

「毎年よくもまあ、これだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。……私のクラスにだけ集中させてるのか?」

きやあきやあと黄色い悲鳴を黙らせるべく、千冬は手を叩く。

それだけで教室に静寂が戻ってきた。

「では、最初の授業を始める」



「呆れましたわあ。まさか響先輩がISを動かせるなんて……」

休み時間。

響に話しかけたのは同業者である沖めぐみだった。

藤井有栖も響の机の近くにいます。

「先輩ではない。そう言うお前は何故ここにいる?」
”向こう”
「の命か?」

「篠ノ之束」

「……ほう？」

響の目に剣呑な光が宿る。

響をこの学園へと送り込んだ張本人なだけに、笑えない。

「藤井有栖。お前もか？」

「え？ あ、はい」

「ま、こうなれば仕方ありませんわ。精々学園生活をエンジョイしませんこと？」

「……ふん。だが、厄介なのは”向こう”の方か。奴ら、有栖クモを殺そうと躍起になっているだろう」

「それに関しては篠ノ之が手を打っていましたよ」

あっけらかんと言いつめぐみに、響は一瞬絶句する。

バカな話だ。

組織から狙わないように交渉した？

いくら篠ノ之束とは言え、それは無茶がある。

組織の存在は誰にも証明できず、ボスの素性も”雀蜂”スズメバチ以外誰も知りえない。

そんな相手にどうやって。

「餌コエを渡した、と言ってましたわ」

「……始末よりも、即物的な力に走るか」

「あら？ 正義は力じゃありませんこと？」

「正義に力が無くとも、悪はいずれ滅び逝くのみだ」

「……ハア、何を言っても無駄ですわね」

真っ直ぐなまでの正義バカに、めぐみは早々に白旗を上げた。
これはダメだとも言うように。

「ほら、お前ら！ 席に戻れ」

と、そこで千冬が帰ってきたため会話は中断。
二人は自分の席へと戻っていった。

「蜘蛛”の正義は俺が継ぐ。……それが、俺の愛なのだ」

ポツリ、と寂しげな色が混ざった声が静寂に消えた。

◇

「ちょっとよろしくて？」

二時間目の休み時間。

声をかけられていたのは織斑一夏。

響と同じ男のIS操縦者であった。

声をかけたのはセシリア・オルコット。

ロールがかった金髪が特徴的な、イギリスの代表候補生であった。

口調が沖めぐみに似ているな、と響は思う。

他人事の上に仲裁する義理も無い。

「訊いてます？ お返事は？」

中々返答がこないの、若干イラついた調子で再び問う。

案外、沸点が低い。

組織の連中も結構その傾向が強いので何も言えないが。

「あ、ああ……んで、何か用か？」

「まあ！ 何ですのそのお返事！ わたくしに話しかけられるだけでも光栄ですのに、それ相応の態度というものがあるのではないか

しら？」

女尊男卑の象徴とも言える態度だろう。

ISの登場により、女は男より優れていると勘違いをしている連中も多いと聞く。

これも一種の社会現象というモノであろう。

「……何か、すごいですね」

「藤井有栖か。……沖めぐみはどうした？」

「野暮用だと言っていました」

有栖の下僕を自称するめぐみが傍を離れるとは思えなかったが、それはまあいい。

未だに言い争いを続ける両者に、二人は注目する。

「セシリア・オルコットさん……でしたっけ？ やっぱり強いんですかね？」

「この学年の中でもトップクラスだろう」

代表候補生の上、専用機までであると聞く。

並大抵の強さではないだろう。

ISの経験が浅い響や一夏とは次元が違う。

「とは言え、それはISを操縦している時に限るだろうが」

「それは……そうでしょうけど」

寧ろ生身で響とタイマン張れる輩なんぞ、男でもそうはいない。

猛スピードで突っ込んでくる普通自動車を無傷で止める怪力を前にしては、誰も太刀打ちなどできはしない。

「それでもアリス様には敵わなかったですわね」

「……あの、沖さん？ 何で私の胸を……？」

「ああ、柔らかいですわあ。ムニユムニユ」

「ひあっ！？ ちょ、沖さ——っ！」

「乳繰り合うなら席に戻れ。もうじき授業が始まるぞ」

突如として現れためぐみに胸を揉まれる有栖。

そんな二人を意に介さず冷たく言い放つ響。

そんな自分達がいつの間にか注目されているという事実気付くのはもう少し先になりそうであった。

3. クラス代表は誰が務めるべきか

「再来週のクラス対抗戦にでる代表者を決めないといけないな」

織斑千冬のその一言が引き金となった。

話題性のためか女子の大半が織斑一夏と藤岡響を推薦。

それに反発したのはやはりと言うべきか、セシリア・オルコットである。

「納得いきませんわ!」

その怒号は教室を駆け巡る。

己より弱い者が代表の座につくことが気に入らないようである。

しかし、グチグチと恨み辛みを延々と喋っていると一夏から反論が飛んできた。

「イギリスだって大したお国自慢ないじゃねえか」

「なっ!?! あ、あなた! わたくしの祖国を侮辱しますのっ!?!」

が、それは火種にガソリンを注ぐ行為だったらしく見事に大爆発。憤怒の熱に当てられたか、一夏が少したじろぐ。

「――決闘ですわ」

そして、そんな一夏へと告げられたのは決闘の二文字。

「……いいぜ、四の五の言うより分かりやすい」

ギロリ、と睨み返すとセシリアは鼻を鳴らして嗤う。

「ふふふ、アリス様……面白くなってきましたわねえ？」

「あの、沖さん。趣味悪いですよ」

「さあ、セシリアさんか織斑くんか！ どっちが勝つか賭けない？」

「あたしはセシリアさんかなあ」

「じゃあ私は織斑君ね！ 大穴だしっ！」

セシリアと一夏の間で火花を散らしている間に盛り上がっていくその他の一同。

決闘を肴に一儲けしようと画策する者もいる。

何と言うか、女の子は強かであるようだ。

「お前ら、バカ騒ぎもいいが今は授業中だッ！！ ……では、織斑、オルコット、藤岡。試合は一週間後の月曜日。場所は第三アリーナだ。分かったな！？」

『はい』

「……織斑女史。俺もなのか？」

「推薦されただろう。他薦された者に拒否権などない」

そう凄まじくは響と言えど簡単に反論はできない。

結局、響が折れる形で千冬の案を呑むのだった。



「わ、分からん……。なあ、響はどうなんだ？」

「一応、基礎だけは分かるが」

「ああ、必読のアレを読んだのか」

「電話帳と間違えて捨てるとは思わなかったが」

「……言うなよ」

響がからかう様な口調で言う和一夏は拗ねたように返す。

「意外ですわね。響が他人と打ち解けるなんて」

「沖めぐみ。お前の中で俺はどんな人間なんだ？」

「強姦魔」

「えゝ……？」

めぐみの言葉が予想外だったのか、一夏が響から距離を取る。

その答えを聞いた本人はと言うと、否定もせずただため息をついている。

「お前もか？ 藤井有栖」

「……すみません、否定できません」

実際、数人の男にめぐみを襲わせたことは事実なので言い返すことはできない。

響は正義の裨としての行動なので罪悪感など持ち合わせていない。しかし、第三者の視点からすれば響はただの強姦魔と何ら変わりない。

「ああ、織斑くんは藤岡くん。まだ教室にいたんですね」

雑談を交わしていると山田先生がこちらに小走りでやってきた。

教室に残っているのは男子二人にめぐみと有栖だけである。

その他の女子は廊下から男子二人を眺めている。

本当に珍獣扱いである。

「……何か？」

「えっつですね。寮の部屋が決まりました！」

「え？ 一週間は自宅からじゃあ……？」

「それだと色々問題があるらしく、急遽決まったんですよ」

はい、と一夏と響は部屋の鍵を山田先生から渡された。
見間違いか、部屋番号が違うように思えるが。

「山田女史。一夏と同室ではないのか？」

「引越しするだけの時間が取れないですし、相部屋になる子も了承してますよ」

何やら作為的なモノを感じるが、響は押し黙る。

ここで問い質したとしても望むような答えが返ってくるとは限らない。

「あら？ 私の部屋に入ってくる人って響でしたのね」

「何？」

めぐみの言葉に反応する響。

改めて部屋番号を確認すると、確かに同室であるためぐみは断言した。

「クッ！ まさかアリス様との愛の巣に竈午が入ってくるなんて……
一生の不覚ですわぁー！」

「黙れ蜚？。……待て、さっき何と言った？」

「一生の——」

「その前だ」

「？ まさかアリス様の愛の巣に？」

「藤井有栖と同室なのか？」

「ええ、当然ではありませんか！」

自称下僕を誇るだけあって、四六時中有栖と過ごすことを至福と感

じているらしい。

響の知るめぐみ——もとい蜚？は歪んだサディストであったと記憶している。

一体何があってマゾヒストになったのか。

「二人部屋を三人で使うのか」

「……両手に花だな、響」

「花と呼べるほど綺麗な女でもない。……織斑一夏は誰と同室なんだ？」

「俺？ さあ？」

「あ、一夏くんは篠ノ之さんと同じ部屋ですよ」

「……箒か」

少し遠い目をしながら一夏は呟いた。

知り合いだろうか、と響は考えたがすぐさまそれを振り払う。

目下の問題はこの蜚？と蜘蛛をどうするべきか、である。

「言っておきますけど、アリス様を襲えば問答無用でぶっ殺しますわよ？」

「悪とならなければ禊も必要あるまい。無論、染まれば矯正するまでだが」

「はあ、二人とも落ち着いてください」

一番苦勞しているのは、何だかんだで藤井有栖なのかも知れない。

4. 蜘蛛と竈午の訓練風景（前書き）

この二人の戦いはどうも地味な上に書き辛い……。

4. 蜘蛛と竈午の訓練風景

「え、ええと……本気ですか？」

有栖は響に思わず問う。

場所は第三アリーナ。

めぐみと有栖も束から専用機を貰っていると知った響が模擬戦を申し込んだのが始まりであった。

では、何故有栖が絶句しているか。

響のISに武装が無いからである。

「本気だ。元より、これ以外にISなど無いのでな」

「それはそうですが……」

「藤井有栖。お前のISも似たようなものだろう？」

「……」

そう言われては、有栖には何も言えなくなってしまう。

篠ノ之束に作ってもらった有栖の専用機。

銘は”鳥喰^{とりくい}”。

武装は先端に刃の付いたワイヤーのみ。

最低限なスラスターすら付いておらず、ワイヤーを操っての陸上戦特化機体であった。

これは有栖の持っていた”蜘蛛糸^{スレッド}”を模したもので、有栖自身もこれでいいと思っていたのだが。

——敵IS、名称”ナルギスボーラ”——

筋肉質な響の身体を、濡れ羽色の甲冑が覆っている。

虫の羽を思わせる形のスラスターと、異様に太い脚部のアンバランス

スさが不気味であった。

「いくぞ——ッ！」

ガオンッ！ と背部のスラスターを思いっきり吹かせて突進する響。有栖はそれを最低限の移動で避け、同時にワイヤーを射出する。

まずはアリーナの壁や地面にワイヤーを張り巡らせなくては勝負にならない。

多くのISが機先を制すに対して、鳥喰のコンセプトは罠を張り巡らせる”待ち”の体勢。

相手をこちらの土俵へ引き摺り下ろし、牙を向く。

空を飛ぶ鳥をも墜とす。

故に鳥喰。

「甘いッ！」

「ッ！」

腕部ブースター——”あぐに火天”を吹かせて百八十度反転し、追撃をかける。

有栖とは生身で一度戦っているため、彼女の戦法は分かっていた。

先天性集中力過剰（CEC）による殺人術。

スレッド蜘蛛糸を用いての罠で敵を絡め取り、殺す。

逆に言えば、罠が完成する前に叩いてしまえばいいのである。

「オオオオオッ！」

有栖を正面に捉え、響は雄叫ぶ。

火天の推力と響の臂力でもって、鳥喰をアリーナの壁面へ吹き飛ばす。

追撃をかけようとしたところで、機体がバランスを崩した。

見るとナルギスボーラの脚部に細いワイヤーが絡まっていた。
簡易的な罠であるが、まさかあの一瞬で張れるなどと誰が思うであ
ろう。

刹那、絡まったワイヤーが音を立てて蠢く。
脚部装甲にギリギリギヤリと火花を散らす。

おそらく有栖がワイヤーを高速で巻き上げているのだろう。
これ以上はやらせんと響はスラスターを吹かす。

その直後に片足が千切れたが無視。

「二度も負けん！」

機体制御をプログラムに任せ、鳥喰へナルギスボーラの拳が突き刺
さる。

「あぐっ……！？」

次いで火天が火を吹き、鳥喰をかち上げる。

他のISならいざ知らず、鳥喰にとって空は身動きの出来ない檻に
他ならない。

「心身に刻め、正義の一撃をッ！！」

怒号を吐き、背部のスラスターで響も上昇。

その勢いのまま鳥喰へナルギスボーラの蹴りを叩き付けた。

ライダーキック
直翅目蹴撃——そう名付けられた必殺技は鳥喰のシールドエネルギー
Iをゴッそりと削りきった。



「お二人ともありえませんかあゝ」

「本当ですわね。と言うか何なんですか？ あの機体」

丁度、アリーナの様子を見ていためぐみとセシリアが感想を洩らす。ISに乗っても根本的な戦い方は二人とも変わっていない。それはめぐみも同じなのだが、そこは棚に上げる。

セシリアは二人のISの異常さに注目しているようであった。片やスラスターすら付いておらず、武装もワイヤー一本の陸戦特化。片や武装を一つも持たず、脚部が異常に発達した不気味な外見。更には鳥喰、ナルギスボーラと言う聞き覚えのない機体名。

「……代表決定戦では要注意ですわ」

「まあ、響の機体は射撃機体に弱いですから何とかかなりそうですけど」

「そう言えば有栖さんの機体は……」

と、セシリアが呟くとめぐみは自信満々に告げた。

「アリス様の機体はああ見えて万能型ですわあ。まあ、確かに珍しい機体ではありますが」

珍しいと言うかイロモノと言うべき機体だろう。

めぐみの機体も相当なモノではあるが、そこは言わなくてもいいだろう。

5. 白い騎士は蒼い雫と空に舞う（前書き）

一夏さんが半分オリキャラになっている気がする。

5. 白い騎士は蒼い雫と空に舞う

白いISを纏う一夏。

そして青いISを纏うセシリア・オルコット。

試合当日、二人はアリーナの空で対峙していた。

一夏の専用機、白式と、セシリアの専用機、ブルー・ティアーズである。

「あら、逃げずに来ましたわね」

その言葉は一夏を侮ったものか、それとも自身の実力に裏打ちされたもの故か。

相対する一夏は何も語らない。

ただ、セシリアの言葉を聞くのみである。

「では、いきますわよ」

六七口径特殊レーザーライフル―スターライトmk?の銃口から閃光が奔る。

事前にそれを察知した一夏はなんとか避けるが、少し掠ったのかシールドエネルギーが僅かに削られる。

「クソッ！」

スラスターを吹かせ、右へ左へと高機動にモノを言わせて駆け回る。速さと動きでセシリアを攪乱させるつもりだろうが、それは代表候補生を舐めているとしか思えない。

この程度に対応できなくて、何が代表候補か。

そう言わんばかりにセシリアはスターライトmk?のトリガーを引

く。

一見変則的に思える一夏の動きを寸分狂いなく予測し、回避地点を狙撃する。

今度は直撃。

白式のシールドエネルギーが大きく削られた。

「ツウ！」

続く追撃を呼び出した近接ブレードで何とか弾く。

ただ、弾いたことによる跳弾で僅かにシールドエネルギーが減ったが。

「驚くのはまだ早いですわ！」

アリーナに響く声と共に、フィン状のパーツが分離。
計四基。

それらが一斉にレーザーを射出する。

何となくイヤな予感をしていたのだろう。

一夏はギリギリで回避に成功していた。

これこそがイギリスの開発したビット兵器の試作型——ブルー・テ
ィアーズである。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・
ティアーズの奏でる円舞曲で！」

踊りに甘い言葉は必要ない。

死が囁く閃光で、無能なネズミを無様に舞わせるといふ勝利宣告に
他ならない。

高速で移動するビットに振り回され、レーザーでシールドエネルギー
を削られていく様は円舞曲と呼ぶには醜過ぎる。

「あまり俺をナメんじゃねえぞ、セシリア・オルコットオオオオ！」

ザンツ、と止まっていたビットを斬り捨てる。

レーザーを撃つ直前と直後に、僅かながらの硬直時間がある。それを見切った一夏は、次のビットを撃墜すべく集中する。

「——そこだ！」

二基目。

目の前で止まったビットを躊躇い無く斬り捨てた。それがセシリアの罠だとも知らずに。

「かかりましたわね」

「何イ！？」

レーザーの射出直前のビットには、当然エネルギーが充填されている。

それを無理矢理斬ればどうなるか、最早語るまでも無い。

膨張した風船に針で穴を開ける様なものだ。

亀裂から溢れたエネルギーが暴走。

結果、白式のシールドエネルギーを根こそぎ吹き飛ばす程の大爆発が起こった。

ビットの金属片と高濃度エネルギーの奔流を直に喰らえばただでは済まない。

一夏の負け。

観客の誰もがそう見たであろう結末は、続く機械音声で碎け散る。

——初期化と最適化が終了しました——
フォーマット フィッティング

その音声の意味は即ち一次移行。ファースト・シフト

これをもって、ようやく白式は一夏の専用機となったのだ。
無骨な凹凸は消え、曲線を描くフォルムへと生まれ変わった。
正に白い騎士の甲冑と言えよう。

「そん、な……今まで初期設定で戦っていたなんて……」

あり得ない、セシリアの目がそう語っていた。

一夏は己が握っている近接特化ブレードを確認する。

銘は雪片ゆきひら式型。にがた
ブリコンヒルデ

戦乙女の愛刀である雪片ゆきひらに酷似したブレード。

「俺は、世界で最高の姉さんを持ったよ」

語る一夏はどこか誇らしげで。

「俺は、俺の家族を守る！」

続く決意は誰にも穢させないと告げる。

「俺は織斑一夏だ！ 極東の猿でもサーカスの道化シロでもねえ！
こエスコートつから先は反撃させてもらおうかアアッ！！」

スラスターを全力で噴出させ、セシリアに迫る。

ブルー・ティアーズは中距離射撃型。

懐に入れば白式のワンサイドゲームとなる。

セシリアもそうはさせまいと、残り二基のビットを動かし一夏の接近を妨害する。

「言っただろうが！ 反撃するってなあ！！」
エスコート

セシリアの前で急停止。

次いで百八十度反転し、ビットから撃ち出されたレーザーを弾く。
そして弾き返された二本のレーザーは、止まっていた二基のビットを貫通させる。

急ぎ振り返る一夏の目に映ったのは、口を吊り上げるセシリアの姿。

「これで——！」

ブルー・ティアーズは四基のレーザーと”二基のミサイル”で構成されるビット兵器である。

そして、一夏が撃墜したのは四基のレーザー。

となれば、残りの二基は当然セシリアがまだ身に着けているということになる。

腰の部分から噴射煙を撒き散らす二基のミサイル。

「俺の——！」

しかし一夏も退かない。

雪片式型の刀身がエネルギーブレードへと姿を変える。

——単一仕様能力”ワンオフ・アビリティ 零落白夜”れいらくびやくや 発動——

その破滅的な輝きをもって、セシリアのブルー・ティアーズとぶつかり合う。

『勝ちだあああああっ——！！』

お互いに敗北を考えず、ただ勝利を確信した叫び。

ミサイルの爆発と雪片式型の斬撃音がアリーナの空を轟かせる。

『――勝者、セシリア・オルコット!!』

そして見事耐え抜いたのはブルー・ティアーズであった。

ほぼ無傷であったのでミサイルの爆発と、零落白夜の斬撃とを耐え切ることが出来たのだった。

しかしブルー・ティアーズのシールドエネルギーも一桁というギリギリのもの。

ISが解除され、地面に横たわる一夏へ声をかける。

「一夏さん」

セシリアの言葉を聞いた一夏は間拔けた声を出してしまう。

高圧的な雰囲気が消えているのだ。

今までのセシリアの態度を考えれば、驚くのは当然と言える。

「いい勝負でしたわ」

「……ああ、こっちこそ。あゝ、その……悪かったな。色々言っちゃまって」

「いえ、わたくしも言い過ぎたと反省しておりますので」

あの戦いは一夏に対する印象を一変させるには充分であった。

セシリアの表情に、もう一夏に対する侮蔑など消え失せている。

一夏とセシリアの試合は、観客の大喝采によって幕を閉じた。

5. 白い騎士は蒼い雫と空に舞う（後書き）

ちよつとした質問なのですが、オリジナルISの機体説明って必要ですかね？

皆さんの意見を下さい。

6. 白い騎士は龍午と戦場でぶつかり合う（前書き）

相変わらず、アラクニド勢の戦いは地味になってしまふ。
そして相変わらず一夏のキャラが崩壊している。

6. 白い騎士は龍午と戦場でぶつかり合う

濡れ羽色の装甲を纏う藤岡響。

太い脚部で大地を踏み鳴らし、前方の織斑一夏を睨む。

本来は試合に勝ったセシリアとの対戦であったが、当の本人が代表を辞退したのだ。

よって自動的にこの二人の対戦となったわけである。

「分かっていると思うけど、手加減は無しだぜ」

「言われるまでもない。……さあ、始めようか！」

思い切り地面を踏み抜き、小さなクレーターが出来上がる。

冗談みたいな怪力に一瞬だけ一夏はたじろぐが、すぐに気を引き締める。

そして白式のスラスターを吹かし、一気に響の懐へと潜り込む。

どの道彼に射撃武器など存在しない。

ならば素早く迫って斬り伏せるのみ。

「その程度の剣速で、俺を傷つけることなど出来んぞ！」

雪片式型の刃を掴み、一夏の動きを封じる。

そして火を吹く火天。

ブースターの推力で一夏を雪片式型ごと押し返した。

「その程度の力で」手加減は無し」だと？ 自惚れるなよ。」殺し

”も知らぬ弱者が、俺の前に立つんじゃない！」

背部のスラスターと両腕の火天にて急接近。

そのまま拳を叩きつける。

寄って殴る。

一夏と同じ、実にシンプルな戦い方だがその威力はシャレにならない。

一発、拳が直撃するだけで白式のシールドエネルギーが五分の一削られるのだから。

「……言うじゃねえかよ、響。ならよオ、お前も覚えとけよ——弱者の意地ってヤツをなあ!!」

迫る拳を雪片式型で、拙いながらも受け流し、太い脚部を斬りつける。

甲高い音と赤い火花が散る。

しかし、脚部には傷一つ付けられない。

削ったシールドエネルギーも僅かなもの。

それでも一夏の表情には笑みしかない。

まるで自分が負ける姿など思いつかないかの様に。

「ぬうん!」

「はああ!」

剣と拳が凄まじい速度で交差する。

時には受け止め、時には流し、時には火花を散らす。

十、二十と交わり合い、お互いのシールドエネルギーはほぼ互角。

手数で攻める一夏に対して、響の拳は一撃必殺。

当たれば碎ける臂力の権化である。

「——織斑一夏。確かにお前の意地は思い知った。侮っていたよ、正直な」

「そりゃどうも。分かってもらえて何よりだ」

剣と拳とが止まり、硬直状態を見せている。

さながら、剣戟の鏝迫り合いと言ったところか。

何の華も無い、極めて原始的な戦だがアリーナは奇妙な静寂を保っている。

熱が無いわけではない。

ただ、彼らの戦に魅入っているのだろう。

漢の戦場おこしに黄色い野次など無用とばかりに。

「可変ライダーは改造人間」

火天に火を起こし、力の均衡を崩す響。

急激な力に耐え切れず、一夏の剣が弾かれてしまった。

「昆虫の特殊能力を武器に、悪を倒す正義のヒーローだ」

体勢が崩れた一夏に追撃をかける事無く、ただ独白を続けている。

そして彼は知るだろう。

彼の得意とする、問答無用の必殺技を。

「では、その昆虫とは何か……知っているか？」

「え？ えっと、アレだろ。バッタだろ」

「……やはり、お前も同じ事を言うのだな」

響の雰囲気ガラリと変わる。

殺気が風となり、一夏の頬に吹き付ける。

アレは駄目だ。

逃げろと本能が警鐘を鳴らす。

理屈では語れない、根性論の極限に位置する業わざがここに顕現する。

響の雰囲気はただならぬモノを感じた一夏は、白式の単一仕様能力ワンオフ・アビリティを発動させる。

雪片式型に、自身のエネルギーが流れるのを感じる。
力強い刀身の輝きこそが一夏の切り札。

「正解は——」

背部のスラスターで急上昇。
そして、その巨大な脚部が牙を剥く。

「竈午だッ!!」

スラスター、二個の火天を使って急下降。
一見ただの跳び蹴りであるが、一夏はそんな楽観的な思考を捨てる。

「負けるかよオオオオオ!!」

零落白夜と直翅目蹴撃がぶつかり合う。
ライダーキック

零落白夜のバリアー無効化攻撃をもともせず、響と一夏はただ己
の死力をもって拮抗する。

「もう誰にも負けられねえんだ! 家族を、皆を守るんだッ! こ
こで躓いて、自分に嘘をつけられるかよ!!」

「お前の考えは理解した。だが俺にも男のプライドがある! 戦場
で勝鬨を上げるのは常に正義と決まっているッ!」

『だから——!!』

ギシギシ、とナルギスボーラの脚部と雪片式型の刀身に亀裂が入る。
しかし彼らは退かない。
退くわけにはいかないのだ。

「お前の負けだ、織斑一夏! 正義を語るにはまだ早い!」

「お前の負けだ、藤岡響！ この戦場に沈んでしまえ！」

そして終幕が訪れる。

ナルギスボーラの脚部が、雪片式型の攻撃に耐え切れず破損。
結果、響の体勢が大きく崩れることになる。

「ぬうーッ!?」

「オオオオオオオオ!!」

獣の如き咆哮と共に一閃。

ナルギスボーラのシールドエネルギーを削り取り、同時に零落白夜も解除される。

『勝者！ 織斑一夏!』

アリーナにアナウンスが波紋のように広がって、観客の熱気が爆発した。

7. 蜚々と中国代表候補生の因縁（前書き）

これより先はヒロインの魔改造……と言いますか、設定の改竄があります。

言ってしまうえば戦力強化みたいな感じですかね。

その片鱗が一夏に出てきておりますが、正直な話アレとは比べ物にならない程に別物です。

はつきり言って、かなりブラック且つ”この展開は無理がある”と一蹴されるような内容になっていくので今の内に書いておきます。

……覚悟は、よろしいですか？

7. 蜚々と中国代表候補生の因縁

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です!」

一繋がりでいい感じですね、と山田先生は言う。

セシリアが辞退し、響に勝った一夏。

当然代表になって当たり前であった。

「それにしても華の無い試合でしたわね?」

「戦場に華など必要ない」

「見る方の事も考えたほうがいいでわよ? 何たってI Sはスポ
ーツ——」

「沖、藤岡! いつまで無駄話をしているつもりだ?」

いつの間にか教室に入ってきて来ていた千冬に目を付けられる二人。
流石に彼女に反抗するという選択肢は無いので、大人しく黙る。

「織斑。代表になったからと言って調子付くなよ?」

「分かってるさ、千冬姉」

一夏が返事をした途端、千冬は手に持っていた出席簿で一夏の頭を
叩く。

中々の音を響かせて、一夏を机に沈めた。

「織斑先生だ。馬鹿者が」

「……はい、織斑先生」

「よろしい」

その鉄拳制裁を見て、騒ごうとするような自殺志願者はこのクラス

には居なかった。

◇

織斑一夏の代表決定パーティが開催されている頃、一人の少女がIS学園を彷徨っていた。

名は凰鈴音——中国の代表候補生である。
フアゼンイン

金色のリボンが月夜に映えて美しいが、本人の小柄な体型は寧ろ可愛いと見るべきか。

ポストンバッグを持って、キョロキョロと周りを確認している。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

しかし肝心の書類に地図は無く、ただ本校舎一階総合事務受付と言う漢字の羅列が踊るだけ。

思わずクシャリと握りつぶしてしまうのも仕方な無い事であろう。

「ええい、まどろっこしいなあ！ 自分で探すわよっ！」

誰にも向けられない怒りが凰を支配する。

それにしても広い。

迷路のような廊下は夜の暗闇と相俟って不気味である。

そんな中、凰は誰かの話し声を聞いた。

「相変わらずのバカ力ですね。ISを一気に二機も運べるとは思えませんでしたわ」

「運搬用のカートも使ってませんでしたよね」

「お前達が軟弱過ぎるのではないか？」

「あなたに比べれば誰もが軟弱ですわ」

と、そこで話し声が途切れた。
どうやら凰に気付いたらしい。
早速声をかけようと凰が口を開こうとした瞬間――。

「……凰鈴音、ですか？」

「なっ――!?」

絶句した。

凰は昔、日本に住んでいた。

しかし両親の離婚が原因で中国へ帰っていたのだ。
表向きはそうになっていた。

実際は凰の父親は組織に目を付けられ、殺された。
その殺した本人が今、目の前にいるのである。

沖めぐみ――嫌われ者の蜚？が。

「知り合いか？」

「ええ、ちよっとした縁ですわ」

「何がちよっとした縁よ……ッ！」

自分の父親を殺しておいて、そんな軽い言葉で済ませるのか。
憎悪の眼差しを向ける凰に、めぐみはただ嗤うだけだ。

「何も知らないんですの？ あなたの父親が何をしていたか、組織
の逆鱗に触れてしまったその理由も」

「ふざけるなっ!! 家族を奪ったくせに! 何涼しい顔で物言っ
てんのよ!!」

ポストンバッグを落とし、一瞬で間合いを詰める凰。

間髪入れずに上段回し蹴りでめぐみの顔面を狙う。

鮮やかに決まるはずだったそれを、予め分かっていたかのようにし

やがんで回避する。

「少しはやるようですけど、蜚^ひを相手取るには不足ですわ」
「くっ、このお!!」

しゃがんだままのめぐみ目掛けて膝蹴りをかますが、これも余裕の表情で避ける。

その態度にますます凰の腸が煮えくり返る。はらわた

そして、凰の懷から出てきたのはボウイナイフ。

刃長二十センチ程の大振りなソレを取り出した途端、銃声と共に弾かれてしまう。

音源はめぐみの手に握られている拳銃であった。

「それを出せば、シャレになんねえですわよ？」
「ッ——！」

床を転がるボウイナイフを一瞥し、めぐみは拳銃を懷にしまった。
実力の差が違いすぎる。

凰は唇を噛み締める。

「でもまあ、流石は中国の代表候補生に申し上がっただけはあるますわね」

「皮肉のつもり？」

「まさか。標的の子供が命を狙いに来るなんて、今まで無かったことですしね」

言い争いは平行線をたどり続ける。

そんなやり取りに痺れを切らしたのか、響がめぐみに言う。

「沖めぐみ。煽ってないで説明をしたらどうだ？ 正直、このまま

説明無しで学園生活を続けられればいずれ暴発するぞ」

「もう少し反応を楽しみたかったですが、まあいいですわ」

「……サディスト
加虐性欲者が」

ようやく事態が収束に向かうことを確信し、響は重いため息を一つ。

「さて、凰鈴音。お前は自分の父親が殺されたから復讐に及んだと言ったな？」

響の言葉に頷く凰。

「で？ 沖めぐみ。組織から抹殺の命が下ったのは何故だった？」

「戸籍の売人……と言えば分かりますわね？」

めぐみの言葉に、凰の頭が冷めていく。

自分の父親の、その正体に。

「彼は組織から脱走。その際に奪った戸籍を売って生活をしていた。……凰鈴音。あなた、本当にそれが自分の名前だと思ってるんですの？」

「――な、にを……？」

「参考までに言っておきますけど、組織から奪った戸籍の中にありましたのよ？ 凰鈴音と言う、誰とも知れない戸籍が」

つまり、つまりそれは――。

己が辿り着いた答えに、凰は頭を振って払い除ける。

「因みに。彼が持ち出した戸籍は全て、”彼が殺した標的”の戸籍ですよ。そして、”何度同じ戸籍を売っている”と思いますか？

”十や二十じゃききません”わよ？」

表に出られない者に戸籍を高額で売りつけ、一定期間の後に売った者を殺す。

そして空白となった戸籍をまた誰かに売りつける。
そのサイクルを繰り返していたため、組織から狙われることとなった。

「そんな彼が、何故あなたに”血塗れの戸籍ぬけがらを当て嵌めたのか”……
想像できますわよね？」

「あ、あ……あた、し、は——」

自分は、誰だ？

凰鈴音として生きてきた十五年間は偽りであったのか。
父親から賜った名前は使い古された戸籍きこうでしか無かったと言う事実。
それが彼女の中で重石となって圧し掛かる。

「う、く……う」

「……言い過ぎだ、沖めぐみ。泣かせてどうする」

「私は事実を言っただけですわ」

「だからお前は嫌われるのだ、蜚？。……凰鈴音」

俯き、声を押し殺して涙を流す凰の頭に響の手が乗せられる。

「気にするなどは言わん。だが、その戸籍なまえは貰っておけ」

「……けど、あたしは……」

「俺と沖めぐみも戸籍かりものでな。気持ち分かる程でも無いが、似たもの同士だ」

「まさか竈午が女の子を慰めるなんて……！？
同性愛者ホモだった彼はどこへいったんですの！？」

「黙れ蜚？。話が拗れる」

突拍子も無く始まった二人の寸劇コントに呆氣に取られる凰。
同時に、悩んでいた自分が惨めなものに思えてくるのだから不思議である。

似たもの同士。

本当の名を持たぬ者であるのに、この差は何なのか。

「まあ、戸籍なまえなんて所詮は識別番号と対して変わりませんわ。自分分は自分なのですから、名前一つで悩んでたらキリが無いですわよ」
「それはアンタだけには言われたく無いわよ！」

めぐみのおんまりな言葉に言い返す凰。
その顔にはもう、さっきまでの悲壮感はなりを潜めている。

「……そう言えば凰さん」

「ああ、鈴で良いわよ。ええと……？」

「あ、私は藤井有栖です。ところで鈴さんはどうしてここに？」

問われた凰——いや、鈴音は見事に固まった。

「あ、そう言えば転入の手続きがあったんだ……」

「あらまあ今まで忘れてたんですの？ ドジですわね」

「うっさい！ アンタの所為よ！！」

その後、三人に受付まで案内してもらい事なきを得た鈴音であった。

7. 蜚々と中国代表候補生の因縁（後書き）

和解に至る道筋が短すぎるのは仕様です、はい。

人の心理って複雑怪奇過ぎて、いざ書くとなると凄く難しいですね。

こう言った具合に、ラウラも変わる予定です。

シャルロットも変わって、箒は——あれ？

箒って今までに出てきたっけ……？

あ、セシリアは……まあ、いいか、な？

こんな作品ですが、今後ともよろしく願います。

8. 白い騎士は乱れ飛ぶ刃を掻い潜る（前書き）

甲龍のスパイク・アーマーがかなり動き回っていますが、その辺りはスルーでお願いします。

あと、戦い方が原作の鈴音とかなり違いますのでご注意を。

8. 白い騎士は乱れ飛ぶ刃を掻い潜る

後日、凰鈴音は落胆していた。

まだ先日の事を引き摺っていると感じた藤井有栖は声をかける。極力、名前で呼ばないように。

「あ、あのう……大丈夫ですか？」

「う、グスッ……ア、リスう……？」

落胆どころではなく落涙寸前だったことに有栖は驚く。

しかし、今は鈴音から事情を聞かねばなるまい。

「どうしたんですか？」

「うう、一夏が……」

涙声で搾り出すように事情を説明する鈴音。

その事情は同じ女子の有栖としては、何とも辛いものであった。要は鈴音の告白を一夏が意味を間違えて記憶していたと言う。

「毎朝私のお味噌汁をもって告白が日本にあるって聞いて、それで思い切って言ったのに……！　もう、何だっけのよう……！！」

「あの、落ち着いて……」

「落ち着けるかッ！　もう許さない！　今度のクラス対抗戦で叩きのめしてやるんだから……！！」

のしのと踏み鳴らして自分の部屋へ戻っていく鈴音。

余りの変わりようにポカンと我を忘れた状態の有栖。

「……元気になったから、いいのか……な？」

そして出てきたのは苦笑だけであった。

◇

クラス対抗戦当日。

アリーナの中央には中国の第三世代IS”シエンロン甲龍”を纏った鈴音の姿がある。

アンロック・ユニット非固定浮遊部位である二個のスパイク・アーマーが肩の横に浮いている。

対峙する一夏も、その身に白の甲冑びやくしきを展開していた。

「いくわよ一夏……。乙女の純情を踏み躪った罪は重いんだからッ
!!」

「え？ あ、いや……。だから、前のアレに関しては謝るって……」
「問答無用！」

二基の大型青龍刀——そうてんがけつ双天牙月を振り下ろす。

一夏は雪片式型で応戦。

一基を何とか受け流し、二基目と鏑迫り合いに持ち込む。

「そう来ると思ったわ！」

直後、一夏の背中に衝撃が奔る。

見ると甲龍のスパイク・アーマーが刺さっていた。

「なっ!？」

「敵の前で余所見なんて、余裕ね!!」

気の逸れた一瞬を狙い、鏑迫り合いを崩す。

一夏は押し負け、体勢が崩れる。

「もらった！」

二基の双天牙月を連結。

そのままバトンのように振り回し、投擲する。

回転しながら迫る刃を一夏は機動力を駆使して何とか回避。

武器を失い、丸腰になった鈴音へ駆ける。

「武器を投げたのは失敗だったな！」

「ふん、これでいいのよ！」

両肩のスパイク・アーマーを一夏へ向けて突進させる。

しかしそんな手は喰らわないとばかりに、雪片式型で軌道を狂わせ、そのまま鈴音へ迫る。

文字通り、これで本当の丸腰となったわけだ。

「そんな攻撃で白式を止められるかよ！」

「そうね、あたしだってスパイク・アーマーで止めようだなんて考えて無かったわよ」

「？ まあいい。ともかく、これで俺の勝ちだ！」

雪片式型を振りかぶり、一夏は必勝の笑みを浮かべる。

対して鈴音に浮かぶのは冷酷な笑み。

自ら罠に飛び込んでくれた。

そう言わんばかりの、毒素を含んだ笑みである。

直後、白式のシールドエネルギーが激減した。

それを確認した一夏は動揺する。

「言ったでしょう？ ”これでいいのよ” って」

ブーメランのように、回転しながら鈴音の手に戻ってきた双天牙月。不意打ち気味に斬り付けられ、一夏は逆に冷静になっていく。

「中国の代表候補生は決して軽い肩書きじゃないのよッ！ ISの性能頼りのアンタに負けられないんだから！」

双天牙月の連結を解除して、再び二基の青龍刀へと戻す。各々を交差するように構えて告げる。

「刻み込んであげる。これが格の差ってヤツよ!!！」

ブンッ、とあらぬ方向へ投げられる双天牙月。回転もせず、ただ一直線に飛ぶだけ。

しかし一夏は油断しない。

二度も不意打ちを受けたのだ。

これで警戒しなければ学習しないただのバカだ。しかし――。

「思った通り、”双天牙月に釘付けね”！」

鈴音が叫んだ瞬間、一夏は何かに殴られたかのように吹っ飛んだ。衝撃に襲われた方向へ集中すると、そこには先程のスパイク・アーマーが。

空間圧作用兵器”龍砲”である。

空気へ圧力をかけて砲身を形成、その先から衝撃を撃ち出すという第三世代の兵器である。

鈴音が意味がありそうに双天牙月を投げたのも、この一撃のためか。しかし、逆に言えば双天牙月を失った鈴音はこの龍砲に頼らざるを得なくなる。

そこにさえ注意すれば鈴音に身を守る術はない。

「なら——！」

斬り捨てる。

そんな覚悟を雪片式型に乗せて、鈴音へ接近する。

「そして、”龍砲に注意すれば安心して攻撃できる”？ 甘いよ、一夏。戦いを知らないから、そんな一直線な思考になる」

二基のスパイク・アーマーから龍砲の衝撃が撃ち出される。

それは未だに宙を舞っていた双天牙月へ。

龍砲の衝撃に弾かれて、双天牙月は一夏の方角へと飛ぶ。

「なあ——ッ！？」

「全てはあたしの掌の上よ。同じパワータイプだからって、戦法が同じだと思ったの？」

ギン、ギン、と龍砲によって軌道を修正され続ける双天牙月。

アリーナの空に二基の巨大な青龍刀が乱れ舞い、完全に一夏の動きを抑制していた。

これが中国の代表候補生の本気。

セシリア・オルコットとはまるで違う戦法である。

セシリアの戦い方は格式ばった決闘を意識させるもの。

鈴音の戦い方はさながら戦場のような、生き残り^{サバイバル}を優先させるもの。

自分が生きるためには欺き、思考を読み、圧倒的な力でねじ伏せる。

鈴音の性格からは考えられない戦法に、一夏は戸惑いを隠せない。

「くっそ！ このまま負けてたまるかよ！」

集中する。

この手段は使いたくは無かったが、使わねば鈴音には勝てない。一撃。

ただ一撃でいい。

まぐれでも、偶然でも、ご都合主義でも、何でもいい。

零落白夜——その圧倒的な攻撃力でもって相手のシールドエネルギーを根こそぎ奪う必殺剣。

舞う青龍刀を避けながら、タイミングをはかる。

チャンスは一度。

外せば勝機はない。

そして——。

「ここだあああッ!!」

スラスターを点火。

多少の攻撃は力づくで突破し、その一刀を振り上げる。

零落白夜——

「勝つ！ 勝ってやるさ！ クラスの期待を背負っておいて、むざむざ負けてられるかよ!!」

——発動、させようとした瞬間、レーザーによる砲撃がアリーナのバリアを突き破って着弾した。

9. 白い騎士と中国の龍と蜚々と

——w u G 5 j s k i s m d h j

アリーナに響く電子音。

フル・スキン
中央に佇む全身装甲。

何かを見定めるようにカメラアイを動かし、やがて空にいる二機のISを捉えた。

——j e j u s F G E j s h s k l

無機質な電子音に確かな歓喜を乗せて、腕部に搭載されているレーザー砲を向ける。
獲物を見つけた、逃がさないと、口ではなく態度でもって語っている。

「……なあ、鈴。後どれくらい残ってる？」

「無理矢理スパイク・アーマーを動かしたら、半分くらいしかエネルギーが無いわよ」

「あんだだけ好き勝手やっておいて半分かよ……」

第三世代の中でも群を抜いて燃費の良い甲龍ならではの戦法である。これが別の機体であつたらとくに枯渇しているだろう。

「それじゃあ、まずは様子見ね」

龍砲の砲撃で双天牙月を弾き、敵ISへ飛ばす。

しかし、迫り来る凶刃など意に介さず二人目掛けてレーザーをぶっ放す。

咄嗟に左右に避け、空振りしたレーザーはアリーナのバリアに更なる穴を開けた。

飛来する双天牙月を無視してまで攻撃に転じる敵の行動に、鈴音はただ驚くのみ。

「迎撃しない？ いや、それを無視してでも攻撃を当てたかった？ でもさっきのレーザーはそこまで高い攻撃力でも無いし……」

「さっきの攻撃で避難を始めたみたいだな。後はコイツが生徒を狙わないように足止めしとかねえと」

エマジェンシーコールが鳴り響き、騒然とした雰囲気戦場を支配する。

その元凶は二人の会話が気になるのか、ただ沈黙を保つのみ。やりにくい、それが鈴音の感想である。

敵の思考が全く読めない。

一夏のような一直線とまではいかずとも、ある程度捻くれた者であろうと読む自信があったために落胆が大きい。

感情を無視した行動、その目的は？

そして隙を晒しているにも関わらず攻撃を仕掛けてこない理由は？ 分からない。

行動に一貫性を感じない。

先程は双天牙月のダメージを無視した砲撃。

今はダメージを入れられるかも知れないのに攻勢に転じない。

「……？」

一夏が何かに気付いたようで、地面に降りてISを解除する。何をやっているんだと鈴音が思った瞬間、ISの砲撃が鈴音を狙って飛んできた。

「なっ!?!」

それを双天牙月で弾き、ますます鈴音を混乱させる。
何故、態々武装している相手を狙った?
そんな事をして迎撃される事は……。

「……もしかして」

「多分、鈴の思っている通りだと思う。コイツ、情報収集用の捨て駒なんだ」

敵のISの傍まで駆け寄っていた一夏が鈴音へ通信を飛ばす。

「それと、イヤなタイマーも見つけたぜ。三分を切ってる。多分、情報を集める時間ってことなんだろう」

「その後は逃げ出すか、それとも情報を渡した後勝手に自爆ないし暴走……と言ったところかしら?」

「確証は無いが、そんなところだろう。この分じゃ人も乗ってなさそう。見ろよ鈴。今まで気付かなかったけど、コイツの脚部。間接が逆だ」

しゃがめば膝が後ろへ突き出る形となっている。
こんな変態的な機体、人間が乗れる筈が無い。

「無人機、ね。確かに動きはプログラムっぽいけど……」

「じゃあ、本気で壊しにかかるか。情報が洩れたら厄介な事になるだろうし!」

距離を取り、再びISを起動させる一夏。
直後に来る砲撃を回避して鈴音と並ぶ。

「一夏、アンタ、エネルギーは？」

「……本気の一撃を一発撃てば空になるかな」

「じゃあ、あたしが囃役ね」

双天牙月を連結させて振り回す。

ともかく敵の動きを止めなければならない。

時間はもう一分ちょっとくらいだろう。

その間に決めなければ、何が起こるか分からない。

「では、私も参加させてもらってもよろしくて？」

『は？』

第三者の声が聞こえ、振り返るとそこにはISを身に纏った沖めぐみの姿が。

名称”トラペゾイデウス”

褐色のクリアパーツで造られた機体、そして背中には二つの大型ブースターと四つの補助スラスター。

「え、と？ 沖？ 何でここに？」

「いつの間にかそこにいる。それが蜚？でしてよ？ まあ、ともかく話は聞かせてもらいましたわ。私が囃役を務めましょう」

「……分かったわ。じゃあ、あたしはアンタが撃墜されないように補助に回るわ」

「ってオイ！ いいのかよ、鈴！？」

めぐみの正体を知らない一夏は、鈴音の言葉に食って掛かる。

しかし、それを斬り捨てたのはめぐみであった。

「今は時間がありませんわ。それに私、できない事は言いませんわよ？」

そう言ってめぐみは大型のマシガン——大瑠璃おおるりを構える。

「まずは速さと弾幕で動きを封じておきましょうか」

爆音を轟かせ、一瞬でめぐみが消える。

直後に降り注ぐ弾丸の雨霰。

そんなめぐみに向かって敵はレーザーで迎撃するも、その悉くが当たらない。

「無駄ですわよ。そんな遅い攻撃が、蜚？に当たると思ってたんですの？」

常に風の動きを察知し、敵の行動や攻撃範囲、果ては設置された罠すらも見破る異能。

エアディテクション

”風読み”——プログラム制御で稼動する機械では、絶対に当てることの出来ない無敵の鎧にして剣。

降り注ぐ弾がセンサーに当たったのか、レーザーの命中精度は更に落ちる。

「頃合ですわね」

弾幕を張っていたマシンガンの砲身を握り、まるで剣のように構える。

すると砲身が柄となり、グリップ部分が刃に変わる。

近接ブレード——窟鬼丸くちぎまわる。

それを一直線に投擲し、敵を地面に縫い付ける。

—h a k e H Y D G R s j k s d k s k s l 5 4 7 5 6 j a h
y a k i a q k l s b n i a j

けたたましい音を響かせて足掻くが、甲龍のスパイク・アーマーも突き刺さり、完全に動きが止まる。

「今ですわよ！」

「おう！」

零落白夜起動。

雪片式型に自身のエネルギーを流し込み、必殺の刃を作り出す。漂う雰囲気になんかを感じ取ったのか、動けぬ身体に鞭を打ってでも脱出しようと試みる。

「アンタは大人しくしてなさいッ！！」

ズドン、と刺さったスパイク・アーマーから零距离で龍砲が放たれる。

この一撃を喰らい、敵の動きは完全に停止する。

「これで――最後だああ！！！」

雪片式型で敵の頭部を突き刺す。

その直後に爆碎。

アリーナに侵入した全身装甲フル・スキンのISは唯の鉄屑へと成り果てた。

10. 黒の雨との邂逅

今月の学年別トーナメントで優勝すると、織斑一夏と交際できる。女子の間で、そんな噂が蔓延していた。

きゃいきゃいと騒ぎ立てる女子達は獲物を狙う猛禽のよう。誰にも知られず爪を研ぎ、その肉へ喰らいつく牙を隠す。

噂に無縁な存在と言えば名も無き蟲三匹のみ。

「これが所謂恋の争奪戦と言うヤツなのですわね」

「お前から恋と言う単語が聞けるとは思わなかったぞ」

「跳ねることしかできない竈午は黙ってなさい」

「二人とも仲が悪いですね……」

喧嘩する二匹に挟まれた有栖は居心地が悪そうだ。

「おはよう」

そして噂の中心にいる少年が教室に入ってきた。

刹那、女子達のお喋りが止まり、皆一夏へ注目する。

予想外の反応をされて、思わず一步下がる一夏。

「……え？ 何だ？」

その問いに答える女子はいない。

しかし瞳は飢えた者のような捕食の欲望をギラつかせている。

異常とも言える色を本能で理解した一夏はそれ以上何も言わず自分の席に座った。

「はーい、それでは授業を始めますよー！」

一夏が身体を丸めていると山田先生が教室に入ってきた。
何やらニコニコしているように見える。

「今日ですね、転校生を紹介します！ しかも二人！」

山田先生の言葉の意味を理解した瞬間、黄色く沸いたのは言うまでもない。

この時期に転校生、それも二人ともがこのクラスへ。
このクラスのパワーバランスが更にカオスになっていく。

「失礼しまーす」

「……」

まずは一人目。

長い金髪を後ろで括った”美少年”。

そして二人目。

銀色の髪に赤い目と言う、ウサギを連想させる見た目であった。
右目に眼帯をしており、刺々しい雰囲気を漂わせている。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、よろしく願います」

”美少年”ことシャルル・デュノアの自己紹介が終わると、大音量で教室が揺れた。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかも美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかったー！」

「え、えと……？」

さすがのシャルルもこの状況には苦笑するしかない。
さて、どうしたものかと思った瞬間、千冬が軽く手を叩く。

「静かにしろ馬鹿者共。元気が有り余っているようで何よりだ。今日の一時間目はグラウンドを軽く十週してから始めるか」

因みにグラウンド一周が五キロである。

千冬の言葉に本気を感じた一同は口を閉じる。

「……」

「ラウラ、挨拶をしろ」

「はい、教官」

その返事に千冬はため息を零す。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

一通りのやり取りが終わり、ラウラは自分に注目する生徒達へと向き直る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そんな簡素な自己紹介と共に沈黙した。
どうやらこれで終わりであるらしかった。

「！ 貴様が――」

クラスに流れる微妙な空気も何のその。

一夏に吸い寄せられるようにこつこつと近づいていく。

そして、その頬へ張り手をかましたのだった。

11. 雨と旋風 1 (前書き)

すみません、大分間が空きました。

えー、何とか生きております、はい。

面接で落ちて落ちてで仕事はまだ見つかってませんがね、少し逃避気味ですよ、ふふふ。

……さて、冗談はさておいて久々の更新ですので色々違和感があるかも知れません。

不定期更新ですが、今後ともよろしく願います。

ああ、それとリリカルなのはの連載の方はまだしばらく更新できそうにありません。

夜の一族とか御神流のトラハ設定引っ提げて来ようかと思いました
が、泥沼化したので構想を練り直してます。

あの状態なのは、どうやって元に戻そうか、と。

……ああ、すみません、関係ない話でしたね。

では、また近いうちに更新できれば。

11. 雨と旋風 1

「ラウラ・ボーデヴィツヒにシャルル・デュノア。つくづく、このクラスは専用機持ちと縁があるな」

「鈴音は正直、別のクラスで一安心ですわ。……正直、気まずいですし」

「その手の問題は本人がカタを付けるだろう。目下、問題があるとするならば……」

響とめぐみが教室の一角を見る。

そこには殺気立つ一夏と、それを睨むラウラの姿。

正直、ここ数日ずっとこれだ。

クラスメイトの一部もほとほとこの空気に滅入っている。

「俺達のように慣れているのは精々二、三人か」

「軍属経験のある専用機組ですわね。……とは言え、初っ端からビシタを張れば誰でも警戒しますわ」

「それに学年別のトーナメントが控えている以上、私闘はご法度になっているからな」

「まあ、それも一夏とラウラの騒動が原因ですわね」

アリーナで乱闘紛いのトラブルを起こし、トーナメントまで私闘はおろか訓練までも規制されてしまっている。

現状、その鬱憤は溜まるばかり。

幸い表立って衝突はしていないが、さながら冷戦である。

「……そして、第二の問題は」

「トーナメント方式の変更。それに伴い、誰がペアになるか……ですわね」

「タッグマッチになった以上、個人参加は認められまい。とは言え……」

武装が一切無い肉弾戦専用のナルギス・ボーラ。
地上戦を主とし、空中戦では戦力外の鳥喰。

そして高機動戦に完全特化されたトラペゾイデウス。

各々の殺人技能に特化された機体だけあって、その性能は変態的であつた。

ナルギス・ボーラは近付いて殴る。

武器は己の身体のみ。

鳥喰は特殊なワイヤーによって罠を張る”待ち”の戦法。

トラペゾイデウスに至ってはめぐみの”風読み”を想定した”ハイパーセンサー無し的高速戦専用機”。

正直な話、これはタイマン及び一对多数を想定した機体なのである。
つまるところ、相方の存在を想定していない単騎無双型。

そんな機体とペアを組んだところで三人の足手まといになるのは必然。

響は相方の火線を考慮できず。

有栖はその罠に味方までかかりかねない。

めぐみはいくら風読みがあるとは言え、肉眼で捉えているわけではないので”敵味方の区別が不可能”である。

「ならば戦法を熟知している者同士で組めればいいが……」

「私と響は相性最悪。アリス様と響もまた同様。幸い、私とアリス様であればまだ大丈夫ですが」

「俺一人が残ることになる、と」

有栖の罠を風読みで察知できるめぐみであれば、相手を罠におびき寄せると言うことも可能である。

しかし、そうなると響の相方がいないのだ。

一夏は既にシャルルと組むらしく、鈴音とセシリアもまた同様。そして他に響と組める程の実力者と言えば……ラウラとなるわけだが。

「この際、文句も言えないか」

「ですわね。まあ、トーナメントまで日もある事ですし、頑張りやがれですわ」

「……ふん。相変わらず口の悪いヤツだな、お前は」

蜚々と竈午の密談は終わり、響はラウラの方へと歩いていく。結果は――。

12. 雨と旋風 2

学年別トーナメント一年の部第一試合。

織斑一夏、シャルル・デュノア ラウラ・ボーデヴィツヒ、藤岡響
対戦カードを見た一夏は自分の頬を思い切り引つ叩く。

——認めない。

そう、ラウラは告げた。

織斑千冬の弟であるなど、断じて認めぬと。
故に一夏は退くことは出来ない。

「証明してやるよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

己は弱い。

どうしようもなく弱い。

それは当然のことで、こんな事態になるなど夢にも思わなくて。
どうして俺が、と思った事もある。
けれど、いつまでも逃げられるほど世の中は甘くなくて。

「ああ、そうだ」

だから俺は決めたんだ。

セシリアと、響と戦ったあの日から。
逃げるわけにはいかない、と。

「決めたか？ 自分の王道を」

響は一夏に問う。

お前の道は何を目指すと。

「俺はもう逃げない。何があろうと、この手で救える誰かを見捨てたりはしない」

「……自己犠牲の象徴だよ、お前は。だが……」

それもまた、正義の道故に。

「潰れるなよ、一夏」

正義を掲げる二人は対極に位置している。
響は正義故の破壊を。

悪皆滅べと拳を振るう殺戮者。

一夏は正義故の守護。

愛しい者は全て零さないと誓う強欲な者。

「まあ、とにかく。今は全力で楽しめるように、かな」

これから始まる試合に向けたシャルルの一言に、二人は首を縦に振って肯定した。



シュヴァルツェア・レーゲン
黒い雨。

ドイツ軍所属のラウラが持つ専用機である。

漆黒のボディに肩には巨大なレールガン。

そして何より凶悪なのはA I C——アクティブ・イナーシャル・キヤンセラー。

慣性停止能力とも呼ばれ、相手の動きを完全に止めるというデタラメなモノ。

どれだけ速く動こうとも、この能力の前には何の意味もなさない。

「貴様が汚点だ」

小さく、しかしI Sに乗る者には等しく聞こえる音声でラウラは呟く。

「教官の名誉を貶める屑が。私の手で消毒してくれる！」

ガオン、と機械音を鳴らすシュヴァルツェア・レーゲン。その様子が相手を威嚇しているようにも見える。

「認めない、認めない、認めない……。口を開けば千冬姉で、その肉親は拒絶する。――ふざけんなよ、ラウラアッ!!」

一夏の一喝がアリーナ全体に響き渡る。

「確かに千冬姉は凄^{メツキ}いさ。ああ、自慢の姉だと胸を張れる。けどな、お前の理想で飾^{メツキ}られた千冬姉なんぞ、俺だって認められるか!!」

胸に抱く思いは共に相容れぬもの。

であるならば、ぶつかり合う他無いのである。

それが、自分の意地を通すと言う事だ。

「完全に二人の世界だな」

「険悪なムードだけどね」

響、シャルルは苦笑いを隠せない。

何だかんだで二人ともこういうノリは良いんだな、と。

「じゃあ、ラウラは一夏に任せるね。僕は……」

「お前の相手は俺と言うわけか」

機械音を唸らせ、禍々しい笑みを浮かべる響。

巨大な脚部で地面を鳴らし、漆黒の竈午は銃姫を見る。

「そのようだね」

連装ショットガン”レイン・オブ・サタデイ”を呼び出し、響に対してぶっ放す。

無数の弾丸を目の当たりにしても、響は全く動じていない。

「成る程。伊達に代表候補を名乗っているワケではないか」

スラスターを吹かせ、凶悪な弾幕から逃れる。

どうしたものかと黙考していると、シャルルの手にはいつの間にか別の銃が握られていた。

アサルトカノン”ガルム”である。

「ッチィ！」

腕部ブースターである火天を吹かせて無理矢理機体を傾かせる。

さっきまで身体があった場所を、ガルムの弾丸が通っていく。

「厄介な……」

ラビッド・スイッチ
高速切替。

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の特性である大容量の拡張領域にこれでもかと積み込んだ火器の数々。

それらを手品のように切り替えて攻撃に転じる技能。

器用なものだと響は思う。

「ならば、早々に決めねばならんか」

片手銃を二挺持ち、こちらを牽制しつつ一夏のフォローに回り始めている彼を見て響は考える。
このままではマズい。

「可変ライダーは改造人間」

次の一撃で沈めよう。

あらゆる攻撃も、あらゆる防御も考えず、己にしか出来ぬ最高の鉄槌を賜ろう。

「昆虫の特殊能力を武器に、悪を倒す正義のヒーローだ」

ズン、とアリーナ全体に圧迫感が押し寄せる。

その根源は今まさに牙を抜こうとしている竈午。

「では、その昆虫とは何か……教えてやろう」

問うまでもない。

ただ教えてやるだけだ。

それが一体何であるかを。

そして、彼が竈午の名を冠する……その理由を。

「それは……」

火天とスラストーを吹かし、上空へ舞うナルギスボーラ。
巨大な脚部が悪魔のように見える。

その標的は、こちらを訝しげに見るシャルルへ。

彼は遠距離攻撃を警戒しているのであろうが、その警戒は無意味だ。

「竈午だッ!!」

空気を裂き、スラスターの噴射音すら置き去りにしてシャルルへと突進する。

己の足で彼のラファールを踏み砕かんとばかりに。

「直翅目蹴撃ッ!」
ライダーキック

己の最も信頼する必殺技の名を叫び、響はシャルルを踏み潰した。

13. 雨と旋風 3

衝撃と大音声、そして観客の悲鳴でアリーナが揺れる。完全にシャルルを下した竈午は、一夏に笑みを向ける。さあ、お前がどう動くのか見せろとばかりに。

「ぐ、く……っ?」

「よせ。しばらくは動けん」

呻くシャルルに響は声をかける。

シールドエネルギーを貫いて、シャルルを完全に戦闘不能にしたのだ。

その破壊力は一夏の零落白夜に匹敵する。

「……今のは、一体……?」

「正義の力だ。まあ、今は二人の戦いを見物しよう」

その言葉に、シャルルは力なく肯定した。



「うおおおおおっ!!」

疾走する。

ラウラが完全に動きを止めてくるなら、こっちはそれに捕まらなければいいだけだ。

一夏の思いはただそれだけ。
疾くラウラを沈めねば。

「その程度、止まって見えるぞ!!」

眼帯を完全に外し、黄金の瞳を露出させる。

越界の瞳——^{ヴォータン・オーシェ}ナノマシンを埋め込んだ疑似的なハイパーセンサーである。

それを用いれば、一夏の百式程度の速さなど無いも同然であった。

「その穢れ、今こそ祓おう！」

肩に装着した大型のレールガンを一夏に向ける。

そして、エネルギーが供給され、薬莢を吐き出して発射した。

「つく！」

飛来するレールガンの弾丸は速く、重い。

斬る事はできないし、避けるには気づくのが遅すぎた。

だから残された手段はただ一つ。

「負けるかよおおお!!」

雪片式型を咄嗟に前へ構え、刀身にエネルギーを流し込む。

零落白夜を発動させ、攻撃力を最大限まで引き上げる。

そして飛来する弾丸へ振るった。

零落白夜と、弾丸の推進力と化していたエネルギーが干渉し合い。

散っていく。

推進力を急激に落とされた弾丸は、一夏に当たる事無く地面へ転がる。

「っは、そんなもんかよ！」

精一杯の強がりを見せる一夏。

その様子に激昂し、感情を吐露させるラウラ。

「き、さまぁ……!!」

「来ないんなら、今度はこっちからだ!」

未だ零落白夜は解除していない。

急激に減っていくエネルギーの中で、今自分が繰り出せる最速の一撃を考える。

そして、一夏は構える。

その形はまさしく突きに移行するための姿勢。

身体を低めに落とし、スラスターを吹かせてラウラへと接近する。そこでラウラは己の切り札を切った。

「停止結界のことを忘れていたようだなッ!!」

ラウラが手を翳し、その先へエネルギーが収束していく。

捕まれば最後。

二度と脱出はできない。

だが、一夏はただ必勝の笑みを浮かべるのみ。

「お前も”コイツ”を忘れてないか!」

駆ける一夏が転がっていた空葉莢を蹴り上げて、その停止結界へと放り込む。

停止結界を解除しようとするラウラに向かって、一夏は雪片式型の刃をシュヴァルツェア・レーゲンへと滑り込ませた。

「そ、んな……!」

「お前の負けだッ! ラウラ・ボーディッヒイイイ!!」

零落白夜の突きが直撃し、
ラウラの駆るシュヴァルツェア・レーゲ
ンは沈黙した。

14. 雨と旋風 4

零落白夜の一撃は、シュヴァルツェア・レーゲンを沈黙させるには充分過ぎる程の火力を秘めていた。

認めよう。

自分は力に溺れ、妄信し、驕ったから負けたのだ。

認めよう。

しかし、トラウラは考える。

このままで本当に自分はいいいのか？

自分が通したかった意地はこの程度で潰えるものか？

——認めない。貴様が教官の弟であるなどと——

一夏を引っ叩いた際、確かそんな事を言ったなと思い出す。

——貴様は弱い。好きな男を馬鹿にされた上、怨敵に成されるがままとはな——

セシリアに勝負を吹っ掛けた時はこんな事を言っただろうか。

『力が、欲しいか？』

不意に甘い囁きが聞こえてきた。

『潰したいのだろうか？ 意地を通したいのだろうか？』

「ああ……」

肯定する。

『ならば叫べ。貴様の理想を。それを叶えてやろうぞ』

「……叶える？」

それは――。

『然り。理想の自分を作り上げ、至高の強さを与えよう』

それは――。

『さあ』

それは――それだけは――ッ！

◇

「ナメるなあああああアアアアッ！！！」

沈黙したシュヴァルツェア・レーゲンが再起動。

シールドエネルギーもある程度回復し、戦闘が可能になっている。

「私の意地は、私の力で完遂する！！ そんな狡っからい真似などしてたまるものか！！！」

怒号を吐き、ヴォータン・オージェの情報进行を冷静に解析していく。

一夏は油断している。

勝ったと思ひ込んでいる。

「何を呆けている、織斑一夏アアアアア！！！」

ワイヤーブレードを無数に飛ばし、一夏の白式を完全に捕らえる。

その時点で一夏はまだ倒してなかったのかと気付く。
遅い。

「消えろ」

すぐさまレールガンを飛ばす。

もう先程のような愚は冒さない。

雁字搦めにされた一夏はレールガンの一撃を防げない。

爆音が響く。

あっと言う間の出来事に、誰も声をあげることができない。

「つううう……」

「ほう」

手に持っていた雪片式型にエネルギーを咄嗟に流し、ある程度威力を減衰させたようだ。

まだ白式のエネルギーは尽きていない。

「だが、もう零落白夜は使えまい」

使うにはエネルギーの残量が少なすぎる。

しかし、一夏は意地悪く笑う。

「はっ、それがどうした。思えば、おれはずっと零落白夜に頼りつきりだったからな。丁度いいんだよ」

「……?」

「ま、そろそろ姉離れしとかないとなって話だよ」

正眼に構え、一夏は告げる。

「さっき言ったよな？ 自分の意地は、自分の力で完遂するってよ。だから俺も、俺の意地は……俺の力で完遂してみせる！」

「ふん、大きく出たのはいいが……果たして勝算があるとしても？」

「まあな。その為の一撃は既に入れている」

疑問符を浮かべるラウラだったが、少ししてエラー音が鳴り響く。

そして気付く。

一夏の仕込みの意味を。

「……私を沈黙させた、一撃か……」

「沈黙させたのは一時的だったけどな。それでも、これで条件は五分だぜ」

再起動する前に受けた一夏の一撃は、A I Cのシステムを完全に破壊していた。

これでラウラはもうA I Cは使えない。

「……ふ、くく……」

何だこれは。

全く、この男油断も隙もあったもんじゃない。

ラウラはもう可笑しくて仕方が無かった。

「ははは、あははははははは！」

エネルギーは一夏が少ないのに。

こちらには遠距離武器があるのに。

それでも、彼は五分だと言ったのけたのだ。

虚勢であっても、躊躇い無く言ったのける胆力は成る程、確かに教官の弟らしい。

弱い弱いと侮っていた自分が、一番弱かったのかもしれない。
そう、ラウラは素直に思えた。

「じゃあ見せてみる。貴様の意地とやらをな」

「言われなくても、刻んでやるさ!!」

レールガンを構えるラウラと、雪片式型を片手に突っ込む一夏。

『私（俺）が教官（千冬姉）の一番なんだッ!!』

各々の心の叫びは重なり合い。

「……バカ共が」

それを聞いていた千冬は、呆れたように……けれど頬を綻ばせてた
め息を吐いた。

14. 雨と旋風 4 (後書き)

これでラウラ戦は終了です。

ヴァルキリー・トレースを使えばフラグ建つんで無しの方向へ。

いや、ハーレム系は本当、苦手で……。

15. 決着の後で黒い雨と白い騎士は語り合う

「馬鹿だな」

「馬鹿ですわね」

「……ごめん、否定できない」

「あはは、その、ごめんなさい」

響、めぐみ、シャルル、有栖は保健室のベッドで動けなくなっている一夏とラウラを見下ろしながら言う。

「ISが動かないから拳か。^{ステゴロ}中々の見ものだったが、ここはIS学園だ」

響の言葉通り。

あの後、ラウラと一夏の機体が同時に沈黙。

再起動もせず、このまま終わるかと思われた。

しかし突如ラウラが生身のまま一夏に特攻。

それを一夏が迎撃して殴るは蹴るは肉弾戦になってしまった。

互いに譲れぬモノがあるとは言え、さすがにこれは黙認できない。

「一昔前の青春ですわね」

「白い学ラン着て木刀担いで、隣町の学校にかちこんで……」

「それは古いです」

虫の三人がコント染みたやり取りをする中で、ラウラがポツリと呟いた。

「……は、何だ？」

「え？」

よく聞こえなかった一夏は再び聞き返す。

「強さとは、何だ？」

今度はハッキリと聞こえた。

強さとは何か。

ラウラは強さの答えは力であると考えた。

だからこそ、圧倒的な火力を以って殲滅するという戦法が身に染みている。

しかし一夏は違う。

圧倒的な攻撃力は確かに有している。

しかし、一夏はそれを多用することなくラウラと互角に渡り合っていたのだ。

A I Cに対する機転、そしてここぞばかりに打ち込んで来た零落白夜の一撃。

そのどれもが、ラウラの知る強さとは別のモノであった。

「強さ、ねえ。言ってしまうば力だろう」

しかし、一夏の言葉はラウラの考えたものと同じで。

「火力とかじゃ無くてさ。こう、上手く言葉にはできないけど……
要は心ゴイツの問題だろ」

ドン、と胸を拳で叩きながら一夏は笑う。

「心、絆。陳腐な言葉だけどさ、強さってのはそう言う力なんじゃないかな？」

陳腐、使い古されたと言うことは即ち、それだけ多くの者が賛同したという証である。

だからこそ積み上げられたモノがあり、重みがあるのだ。

「……そうか。心、絆の力……か」

「まあ、俺もまだまだ弱いからよ。確かな解答なんて持ってないけどさ」

けれど、一夏はその言葉こそが真実であると思っている。

セシリア、鈴音、シャルル、響、めぐみ、有栖、そしてラウラ。

今まで出会い、戦い、そして――。

「一緒に頑張ってみようぜ、ラウラ」

「……ああ、そうだな。いずれは決着もつけねばならんだろうし」

「今度は勝ってやる」

「こちらにも負ける気など無いさ」

学年別トーナメント。

その第一回戦の試合が消化し終わるまで、ラウラと一夏は笑い合っていた。

雑談の話題は専ら千冬の事であったので、見舞いの四人はただ苦笑しか出来なかった。

15. 決着の後で黒い雨と白い騎士は語り合う（後書き）

箒の存在をすっかり忘れていた。

どうしようか、どうやって今からねじ込もうか。

16. 名も無き虫と龍と剣と

織斑一夏とラウラ・ボーディッツとは乱闘の暴挙により失格。

同じペアである藤岡響とシャルル・デュノアも連帯責任で失格。

そんな事件がありつつも、学年別トーナメントは決勝戦。

藤井有栖と沖めぐみのペア、そして篠ノ之箒と凰鈴音のペアという対戦カード。

「あれ？ 箒と鈴っていつの間に仲良くなってたんだ？」

「篠ノ之、か」

一夏は疑問を浮かべ、響は顔を顰める。

篠ノ之。

それは今の響にとっての始まりの名である。

ナルギスボーラと名付けた専用機を起動させてしまった瞬間を目撃され、興味を持たれてしまった。

世の人々が天才と謳うモノ、篠ノ之束。

「あんなモノが持て囃されるとは、世も末だな」

「……何がだ？」

そんな響の心情など知らない一夏はただ首を傾げるのみだ。

「しかし、篠ノ之と言えば……ISの開発者を思い浮かべるが」

「ああ、アイツは篠ノ之束の妹だよ」

ラウラの眩きを拾った一夏は補足する。

素手の殴り合いを通じて何かを感じあったのか、二人の関係は改善している。

お互いの胸中に抱く人物が同じなだけに、ぶつかり話して意気投合、
と言ったところであろう。

「そう言えば有栖とめぐみはどんな戦い方をするんだろう？」

転校して来て間もないシャルルの疑問はもつともである。

その戦い方がISの戦術を根本的に崩したありえないモノだと言う
事を、彼は知らない。

◇

まず感じるのは鋭い殺気。

そして、有栖の目の色が殺戮本能に従う虫のように見える錯覚。

鈴音は人知れず息を吞む。

この二人は、殺しを知っていると思わせる程の剣呑な雰囲気。

「では、行きますわよ！」

二つのブースターが火を吹き、あっという間にめぐみの姿が掻き消
える。

これがトラペゾイデウス。

高速を超えた雷速にて獲物を狩る機体である。

対して有栖の鳥喰はその場からじっとして動かない。

不気味な沈黙。

それは、巣を張り待ち伏せる蜘蛛を連想させる。

「——ふっ！」

短く息を吐き、訓練用ISの打鉄のブレードを振るう筈。
その剣風にて空気を裂き、揺らぐ蜘蛛の糸を捉えた。

特殊ワイヤー、名をアラクネー。

それは有栖の目であり剣であり盾である。

ワイヤーの振動で伝わってくる情報を分析し、敵の位置を見破り誘い込む。

蜘蛛の名を冠しているのは決して伊達や酔狂ではないのだ。

「……硬いな」

箒はポツリと呟いた。

切断する気で剣を振ったと言うのに、当のワイヤーは揺らぐだけ。

太さが均一であれば、その硬さは鋼鉄の五倍。

伸縮性はナイロンの二倍。

そしてその理論を正しく実現したアラクネーであれば、飛行機ですら受け止める。

「バレたのであれば仕方ありませんね」

有栖は苦笑し、ワイヤーを高速で巻き戻す。

そして上から高密度の弾幕が降り注ぐ。

それも、有栖を綺麗に避けて。

「なあっ!？」

「くっ!」

トラペゾイデウスの大瑠璃。

その弾幕はそこら辺のマシンガンとは比べ物にならない。

篠ノ之束がばら撒きを前提で一から造ったハンドメイド製である。

普通なワケがない。

「いいのですわよ? あなたたち」

アラクネーを巻き戻したとは言え、有栖の周りには予め仕込んでおいた糸の結界がある。

それは蜘蛛糸。^{スレッド}

己の得物を張り、めぐみに自分の位置を教えているのだ。

風読みがハイパーセンサーの役目を果たすめぐみは敵味方の判別ができない。

故の策。

そのことにまだ二人は気付かない。

「こんのオ……虫がナメンじゃないわよオオオオ!!」

二基の双天牙月を持ち、鮮やかに舞う。

降り注ぐ弾幕を双天牙月の刀身で弾き、有栖へ向かうように調節する。

弾丸の軌道を読み、的確に弾くその技はまさに神業と言える。

「流石にこれは避けられないな」

ならば、と箒は覚悟を決める。

ブレードを横に構え、大きく一閃。

弾かれた弾丸と殺到する弾丸とがぶつかりあい、箒へ向かう弾幕に穴が開く。

「しかし、このままではジリ貧か」

その穴へと素早く滑り込み、また横へ一閃。

勝負を決する程の決め手に欠ける、とただ歯噛みするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7890w/>

インフィニット・ストラトス 《名も無き虫はカゴの中》

2011年11月27日12時54分発行